

「研修会等名称」

大学コンソーシアム京都 2025 年度 第 31 回 FD・SD フォーラム

「2040 年の京都の大学 — 我々はどう教え、学び働いていくのか — 」

場所：同志社大学 今出川キャンパス

期間：2026 年 2 月 28 日～3 月 1 日

1. 研修の内容

今年で 31 回目を迎える大学コンソーシアム京都の FD・SD フォーラムは毎年有益なテーマに関する大学教育問題について情報を得られる貴重な機会となっている。今年度については教職協働をテーマとした分科会が 2 つもあり、近年、重要性が増していると思われるので出席したかったが、研修参加者の主たる関心である EdTech と授業評価やアセスメントテストに関する分科会と調整がつかなかったのは残念であった。

2 月 28 日 10 時～12 時 30 分 第 1 分科会 大学における教育評価の在り方再考 — 新学習指導要領導入後の教育評価

第 1 分科会のテーマは「大学における教育評価の在り方再考」であるが、松下佳代氏の発表が、流石に当該分野の第一人者らしい聴き応えのある内容であった。それに対して、山下氏と高橋氏の発表はどちらかというと、新学習指導要領導入後の教育評価の具体的な事例報告的な内容だったので、ここでは松下氏の発表についてのみ報告する。

松下氏は昨今の教育評価についてジェリー・ミュラーの考えに基づいて「測りすぎ・測りまちがい」が目立ち、測り過ぎだけであればまだ良いが、不適切な測定と言わざるを得ない測りまちがいが多いと指摘する。そして、従来の教員が「何を教えたか」の評価から、近年の学生・生徒が「何を学び、身につけることができたか」へのシフトにより、測定方法に対する考え方を変える必要を指摘した。量的評価 Vs 質的評価、直接評価 Vs 間接評価の 4 指標のそれぞれの特徴を理解して、どの評価方法が何を測定するのに適しているのか、不適切な評価方法で測定していないかを常にチェックする必要を指摘した。

2 月 28 日 14 時 30 分～17 時 第 6 分科会 「EdTech で推進する個別課教育」

今回のコンソーシアムで一番聴き応えのある分科会であった。まず atama plus 株式会社の小城擁二氏から「AI による個別最適学習と高等教育における活用事例」と題して atama plus 社が提供するシステムの紹介があった。atama plus は教育機関へのオンライン AI 学習プログラムをいくつも提供しており、すでに 20 大学以上が導入していて、聴講していてもたいへん魅力的なプログラムであった。

次にその atama plus と提携して新しい入試プログラムを始めた立命館大学の新井昌明氏からの発表であった。atama plus が得意とするオンライン AI 学習を入試と入学前教育に応用した取り組みの発表であり、たいへん興味深かった。ちなみに、近年、事前学習連動型年内入試に取り組む大学がいくつか出てきている。

3 番目のベネッセコーポレーションの柏木崇氏からは「生成 AI と高校教育」と題して発表があった。高校での生成 AI の活用例がふんだんに報告され、今後、年々、高校の授業で生成 AI を使った授業を経験した学生の数が増えることは容易に想像でき、本学としても受け入れ態勢を強化する必要を感じた。柏木氏の発表は実は二部構成になっており、「生成 AI と次期学習指導要領」が後半に付け加えられていたが時間の都合情、駆け足で済ませたのは残念だった。すでに作業が始まっている次期学習指導要領では生成 AI についても何らかの指針が示されることは明白なので、

10年、20年後を見通した本学の対応を強化する必要を感じた。

最後は同志社大学の宿久洋教授からの「大規模私立大学における生成AIと電子教科書を援用したデータサイエンス・AI教育」と題した報告が行われた。大規模・有力校ならではの意欲的な取り組みで、最先端の取り組みとの違いを痛感する発表であった。

3月1日10時～12時40分 シンポジウム「AI時代／少子化社会における大学（教育）のあり方を問う」

本シンポジウムは大学教育にも関わっているが、基本的には大学外からAIや教育に関して発信をしているシンポジストからの報告・発表であった。理論的な内容よりどちらかというと実践的、実際的な内容が主であり、得るものは多かったが、報告は割愛する。

3月1日14時～16時30分 第9分科会「大学におけるアセスメントテスト(ジェネリックスキル測定テスト)の活用事例」

本分科会は本学も導入しているリアセック社のPROGを導入している各大学からの活用事例が主であった。まず最初にリアセック社の酒井氏からPROGに関する簡単な紹介があり、続いて、共立女子大学の出口氏、京都橘大学の山本氏、大阪工業大学の椋平氏から、各校における活用事例が紹介された。個別の内容については割愛するが、各大学ともPROGの結果から教学(マネジメント)改革や学生指導改革に結びつけている取り組みが報告された。PROGが測定する内容は多岐にわたり、そのすべてを対象とすることはむしろ得策ではないので、特定の一部からで構わないので、PDCAに繋いでいくことにもっと真剣に取り組む必要を感じた。

2. 研修の成果

毎回感じることであるが、他大学の危機感と改善に向けての取り組みはたいへん参考になり、もちろん、最もコアな部分は秘されているであろうが、惜しみなく情報を提供してくださる各大学には感謝の気持ちしかない。今回は500名以上の参加があったと聞いており、教職協働の分科会が2つもあったことから分かる通り、事務局からの参加・発表が年々増えている。本学の今後の取り組みに期待したい。

3. 授業への研修成果の反映状況

今年度は報告者が担当する授業の一つで生成AIとプレゼンテーションを応用した授業を実践して、手応えを感じた。我々が想像する以上に、学生には自ら学ぶ力があると思われ、それを卒業までにどれほど伸ばすことができるかが大学の使命であることを痛感した。次年度は外国語の授業をどのように再生するかについて検討を開始したい。

学部長	学習・教育支援センター委員長	学習・教育支援センター委員会	名古屋教務課長	係